

ハンガリー動乱50年:経済学者の群像

盛田 常夫

動乱と知識人

今秋、ハンガリーは動乱（ハンガリー革命）50年周年を迎え、さまざまな行事が計画されている。動乱をくぐり抜けた人々の多くが、国外に亡命した者も国内に残った者も、すでに他界している。現閣僚もほとんどが動乱以後の世代で、動乱の記憶はない。50年の歳月は動乱を過去の歴史に埋め込むのに十分な時間だ。

それぞれの当事者が人生のどの時期にこの事件に遭遇したかで、その後の人生が決まった。国外に亡命した多くは20歳前後の若者だった。これより5～6歳も若いと、両親が亡命しない限り、自らの意思で国外脱出を図ることは難しかったし、20代後半の若者には簡単に亡命できない家族事情もあっただろう。30代の働き盛りで、職場や地域で動乱の指導的役割を果たした者には、亡命か国内残留か難しい決断が迫られた。実際、国内に残る決断をした指導者の多くは絞首台に送られた。

これだけの歴史時間を経ても、いまだ動乱の記憶の中に生きている人々もいる。INTELの社長・会長を務めたグローヴは、頑なにハンガリー訪問を拒み続けている。やはり動乱で国を離れ、1994年にノーベル化学賞を受賞したオラーはまだ健在で、定期的にハンガリーを訪問している。投資家のソロスは戦後直後にハンガリーを離れたので動乱には関わっていないが、体制転換直後から精力的にハンガリーとの関係修復に努めている。

動乱で亡命し世界的な成功を収めた人々がいる反面、国内に残り、動乱鎮圧（革命敗北）後の苦しい時期を過ごしてきた知識人がいる。ある者は不遇のうちに無念の死を遂げ、ある者は動乱以後の体制改革に希望を見つけ、さらにある者は政治から離れて学問研究に邁進して、その後の人生を歩んだ。歴史的事件の裏には、さまざまな人間模様がある。

ピーテル・ジョルジュとタルドシュ・マルトン

6月初め、当地の新聞でタルドシュ・マルトンの訃報を知った。カーダール体制における改革派知識人を代表する人物の1人だった。1928年生まれ、タルドシュはユダヤ人の家庭に生まれ、ブダペストのドイツ帝国学校に通った。多くのユダヤ人青年と同様に、ナチスからの解放後、ドイツ軍と戦った共産党に加わった。全国学生連合書記の役割を担ったタルドシュは、政治的エリート養成の一環として、レニングラード大学へ留学する機会を与えられた（1948-1952年）。彼にとって、それが転機になった。

タルドシュのレニングラード大学留学は、社会主義への確信を強めるどころか、ソ連型社会主義の失敗を確信する4年となった。ハンガリーより生活状態が悪いソ連の現状に失望したのだ。この留学経験がその後の彼の人生を決めたと言ってくれたことがある。

ソ連から戻ったタルドシュは国家計画庁にエコノミストとして勤務した。この頃に、ハンガリーの経済改革のもっとも重要な人物であるピーテル・ジョルジュと知り合った。ピーテル・ジョルジュは開明的な共産主義者で、戦前はラーコーシとともに長期間獄中にあっただが、戦後は中央統計局の創設に携わり、タルドシュと出会う1950年代初めには中央統計局長官の地位にあった。それが縁で、ピーテルの娘を妻に娶ることになった（1955年）。

当時、ピーテル・ジョルジュは計画経済の行き詰まりを感じ、市場経済システムの導入が不可欠であると考えた。そこで、彼は有能な若い研究者を求め、人材の発掘と養成に努めていた。その若者の1人がタルドシュであり、もう1人がコルナイ・ヤーノシュであった。

さらに、共産党の若いブダペスト地区幹部で経済担当に成り立てのニエルシュ・レジュューもまた、ピーテルに教えを請う1人だった。後に、

ニエルシュは党中央の経済改革の責任者として、1968年の経済改革の実現を図り、一躍その名を知られることになった。

ニエルシュ・レジュー

1956年の動乱に際して、タルドシュは計画庁の中に「革命委員会」を組織した。このため、動乱鎮圧後に計画庁を追放され、景気循環・市場経済研究所へ左遷された。以後、タルドシュは国内の反体制、改革派経済学者としての道を歩むことになった。

そのタルドシュが再び脚光を浴びるのは1980年代である。経済改革への抵抗が強まった1970年代半ばにニエルシュは党中央の役職を解かれ、経済研究所所長に移動した。ニエルシュはタルドシュを経済研究所に呼び寄せ、この二人が1980年代の第二次経済改革の原動力になり、1989年の体制転換にいたる変革の道を開いた。

ニエルシュはカーダール亡き後、最後のハンガリー共産党（社会主義労働者党）の党首となり、共産党の幕引き役を担った。1989年初夏に関大使とともに共産党本部にニエルシュを訪ねた時に、彼の口からカーダールの死去を聞かされた。1980年代半ばに、外務省の招聘プログラムでニエルシュが訪日した折、2日ほど東京の町を案内したり、大学でセミナーを開いたりしたことがある。党の幹部でありながら思慮深く、物静かな学究的タイプのニエルシュは、日本の学者にも評判が良かった。

1980年代のタルドシュはニエルシュとともに、ハンガリー社会主義に持株会社のような資本主義的な要素を入れていく改革案を提起した。これが社会主義の改革に限界を感じていたコルナイとの距離を広げ、さらに1990年代初期の政策提言でも見解の相違が増幅され、二人の関係が気まずいものになった。

筆者が大使館専門調査員で当地に勤務していた1989年に、タルドシュが創設した金融研究所に定期的なブリーフィングを要請した。タルドシュ本人が行う時もあったが、たいていは金融研究所や経済研究所の研究員が、ブリーフィン

グしてくれた。その中には前経済大臣のチツラグ・イシュトヴァーンもいた。

体制転換が始まった1990年初頭には、やはり動乱時にアメリカに亡命し、インディアナ大学教授になったポール・マーラーとともに、タルドシュは新政府への経済政策提言策定のための国際的組織（ブルーリボン委員会）を立ち上げ、マーラーと共同議長の役割を果たした。アメリカからソロスも頻繁にこの会合に顔を出していた。野村総合研究所がこの委員会のスポンサーになり、日本でも会合を開いた。マーラー、タルドシュと私の三人で、中日新聞で鼎談も行った。何度も個人的な話をする機会があったが、タルドシュからライフヒストリーを語ってもらう機会を失った。コルナイとの長時間のインタビューやニエルシュのインタビューの記録を取ったので、次はタルドシュと考え、彼に電話する毎に、そのことを話し合っていたが、いつの間にか緊急性を感じなくなり、その機会を永久に失ってしまった。

コルナイ・ヤーノシュ

同じくピーテル・ジョルジュを師とするコルナイは、高校を卒業後、共産党中央機関紙編集局に入った。1954年の編集局における記者たちの反乱（ラーコーシー派にたいする）によって、編集局を追放され、設立されたばかりの経済研究所に新たな職場を見つけることになった。共産党の経済記者時代に蓄積した経験をもとに、社会主義システムの問題を解明した著作（博士候補論文）「経済管理における過度集権化」が動乱直前の1956年9月に審査を受け、研究者間でセンセーションを巻き起こした。動乱後の混乱に乗じてこの論文が出版され、さらにその英語版もオックスフォード大学出版局から発刊され（1958年）、社会主義研究分野でコルナイの名前が国際的に知られることになった。

動乱にはかつての編集局の上司や仲間が加わったが、コルナイは非合法的な活動から一線を画していた。編集局時代の直接の上司が絞首刑に処せられたギメシュ・ミクローシュである。

動乱から暫く経て、コルナイの博士候補論文が反革命の経済思想として批判の対象になった。これで経済研究所を離れることを余儀なくされ、加えて動乱時におけるギメシュとの関係を尋問される毎日となった。他方で、コルナイはその能力を見込まれ、新政府の経済政策立案への参加を依頼されたが、そのすべてを断り、学問研究の道に埋没した。政府・党との協力を一切排して自らの道を貫く頑固さは、1980年代からの改革促進過程でも変わらず、その姿勢が同僚の改革派経済学者から批判を受けた。

1960年代初めに、コルナイが数学者のリプタークとともに仕上げた二本の論文が、国際計量経済学会の機関雑誌に採用され、数理経済学の世界でも一躍名の知られる存在になった。それに続き、正統派経済学の中核理論である一般均衡論を批判する大胆な著作『反均衡』を出版し（1971年）、理論経済学の世界でも広く知られる存在になった。以後、コルナイは、ほぼ毎年、アメリカあるいはイギリスの大学に招聘される生活をするようになったが、けっして亡命の道を選ばなかった。とくに1970年代初めのケンブリッジでは、ジョン・ロビンソンに代表される伝統的な経済学者とフランク・ハーンに代表される数理経済学者との軋轢が顕著になり、これを仲介できる人物としてコルナイに白羽の矢が立てられた。しかし、コルナイはこの要請も即座に断った。これらの招聘は皆、移住を前提するものだったからである。

1980年に発刊された『不足の経済学』は、社会主義経済における不足現象の再生産を、システムに固有な問題として解明した著作である。この著作が発したメッセージ、つまり「社会主義経済は不足を解決できない」という含意は、1980年代のソ連・東欧や中国における経済改革の機運を理論的に支える役割を果たした。コルナイのこの著作は、ソ連・東欧のほとんどの諸国で非合法に翻訳され、改革派知識人の間で回し読みされた。ロシアの新興実業家の群像を描いたDavid E. Hoffmanの*The Oligarchs* (Public Affairs, New York, 2002)の中に、コルナイことも記されて

いる。当時、ロシアの改革派知識人の間では「コルナイを読んだか」と聞くのが、挨拶代わりになっていたという。この著作がソ連・東欧や中国の改革派経済学者に及ぼした影響は計り知れない。伝統的なスタイルと違う社会主義分析手法は新しい理論パラダイムを示すものとして、この分野の研究者の誰もが注目した。日本でも1980年代のこの分野の専門研究で、コルナイを引用しない人はいなかった。

この理論的著作で、コルナイは一つの区切りを付けたようだ。この時期には、スタンフォード大学とUCLAからの教授招聘の話が進んでいたが、最終的に1986年にハーヴァード大学教授の招聘を受け入れた。ただし、ハンガリーとアメリカを半年ずつ往来するという条件に拘り、教授職を辞するまで、この生き方を貫いた。

ブローディとベレンド

コルナイ世代のハンガリー経済学者・経済史家で、国際学界で名を知られているハンガリー人は数理経済学のブローディ・アンドラーシュと経済史家のベレンド・T・イヴァン。両者とも日本でもよく知られた学者である。とくに、ベレンドは日本を何度も訪問したことがあり、彼の薫陶を受けた日本の経済史家も多い。

ベレンドは体制転換時期に科学アカデミー総裁の地位にあり、カーダール引退後の共産党で中央委員に任命された。1988年から1990年にかけて、ハンガリー共産党内部の亀裂が拡大し、中央委員会で激しい論議が交わされた。この時期、筆者はちょうど日本大使館勤務にあり、中央委員会が終わる度にベレンドを訪ね、委員会の議論の内容を教えてもらった。ベレンドは共産党が設置した「ハンガリー動乱」再評価委員会の座長を務め、「ハンガリー動乱は人民蜂起」とする報告を準備した（1989年12月）。体制転換後、アメリカに移住し、現在はUCLAのヨーロッパ・ユーラシア研究所（旧ソ連・東欧研究所）所長を務めている。

ベレンドは歴史分野なのでコルナイとの関係は希薄だが、コルナイとブローディの関係はタ

ルドシュと似通ったところがある。投入産出分析とその手法を応用した経済理論で国際的に知られるブローディは、コルナイより早く数理経済学の世界に入り、コルナイが数理経済学の道を歩み始める際に、共同研究者となる数学者リプタークを紹介した仲である。ところが、コルナイが1960年代後半からほとんど毎年のように長期に国外の大学・研究所へ招聘されるのにたいし、ブローディには投入産出分析学会以外から声がかからなかった。また、ブローディはコルナイの『不足の経済学』刊行においても、校閲者として積極的な評価を下して著書の発刊に寄与したが、コルナイが国際的な名声を得るのにたいし、ブローディの出番は少なかった。嫉妬に近い羨望があったことは間違いない。余談になるが、ブローディの息子は、ハンガリーでよく知られたポップス歌手・作曲家である。

タルドシュなどの改革派経済学者が政治的な圧力を感じながら、国内での改革に力を注いでいるのにたいし、コルナイは国内改革に一切かからわず、国外で理論活動を展開していたことに、改革派の理論家は快く思っていない。この種の軋轢、羨望や嫉妬は学界では良く見られる現象であり、一般社会でも普遍的な現象だが、ハンガリーにおける改革派経済学者とコルナイの生き方の違いは、1956年の動乱が契機になっている。このあたりの事情は、昨年発刊されたコルナイの自伝『思索する力を得て』（邦訳『コルナイ・ヤーノシュ自伝』日本評論社、2006年）に詳しい。

不可解な自殺や事故

最近、フサル・ティボールの『カーダール』（*Kádár – A hatalomévei 1956-1989*）が発刊された。ソ連共産党とハンガリー共産党（社会主義労働者）との関係を記した著作だ。現在、ソ連共産党政治局の議事録が1954年から1974年まで公開されている。その資料にもとづいて記されたカーダール時代録である。

この著作ではカーダール政権が危機に直面した時期のことが描かれている。ハンガリー

では1963-4年頃から経済改革が開始され、多くの経済学者を巻き込んだ委員会が立ち上げられた。これを統括したのが、ニエルシュ・レジューである。最終的に、1968年1月1日をもって、指令経済体制を廃止し、市場を利用した制御された経済体制へ移行することが宣言された。もちろん、宣言されたことと、実行されたことは別物であるが、ちょうどこの年の夏にソ連軍（公式にはワルシャワ条約機構軍）が、チェコスロバキアの政治改革（プラハの春）に介入すべく、プラハに戦車を送り込んだ。

事ここにいたって、ソ連共産党政治局は東欧体制の緩みが社会主義の崩壊を導くという危機感を抱き、ハンガリーの改革路線に介入して、カーダールを交代させるシナリオが浮上したようだ。以前にニエルシュが語ったところによれば、カーダールはチェコスロバキアとソ連との仲介役として、最後の瞬間までハンガリーとソ連国境付近で列車に待機していたソ連共産党幹部と交渉にあたっていた。しかし、その仲介は奏功しなかったばかりか、カーダール自身の進退にかかわる事件に拡大していった。ハンガリーの経済改革が中途半端なものに終わった原因の一つに、このような歴史的事情がある。

フサルはソ連の圧力が強まった1968年から1973年にかけて、改革派の著名な人物や政治家、諜報部員の不可解な自殺や事故が続いていることを一つのテーマとして取り上げている。その最初の事例が、1969年1月4日のピーテル・ジョルジュの自殺である。ピーテルはソ連軍のプラハ侵攻を批判した廉やナポレオンの金塊処分というフレームアップで拘束され、収容された病院で「自殺」した。「自殺」現場はタルドシュとその妻（ピーテルの娘）が確認しているが、改革派への無言の脅迫行為として行われた殺人ではないかという疑いが晴れない。

このことを含めて、タルドシュから直に聞き取ったが、その機会を永久に失ってしまった。

（関連記事は、<http://morita.tateyama.hu>を参照されたい）